

次代を担う若手研究者の皆さんへ

黒田 優

東邦大学医学部解剖学講座微細形態学分野教授

何にでも好期があるように、研究にも好期がある。20代、30代の一年間と50代のそれは、物理的期間は同じであっても質的には明らかに異なる。何が違うかは、容易に実感もしくは想像できると思うが、体力や集中力や発想力等が加齢とともに落ちてくる。経験による老練さがそれなりの成果や論文を形作ることではできても、研究前の予想(仮説)内の成果に留まることが多い。もちろん、例外も多々あるし、逃げ道につながる限界設定は避けるべきだが、胸が躍るような想いで仕事に没頭できるのは40代までが多い。特に、30代が研究の好期であり、好機でもある。40代までの皆さんは、健康を害わない限り、昼夜なく、土日なく研究に邁進し、素晴らしい成果を思う存分上げて欲しい。

このような意欲的な若手研究者の成長は、指導者や先輩研究者の研究に対する姿勢や能力に依存する。才能にいくら恵まれた若手研究者であっても、指導者に恵まれなければ優れた研究実績を出すことは難しい。一方、資質は普通でも意欲ある若手研究者が優秀で熱意のある指導者や先輩の指導を受ければ、立派な成果を上げることや優れた研究者に大成することも可能となる。因みに、本学部出身者が研究においても高いポテンシャルを携えていることは、留学先での研究実績が証明している。本学部には国内外の留学経験者が数多く在籍しているが、ほとんど例外なく、留学先での素晴らしい研究成果を一流学術雑誌に発表している。然るに、本学部全体の研究レベルを客観的に評価すれば、残念ながら必ずしも高いとは言えない。この現実、施設・装置等のハード面での研究環境の劣後もあるかもしれないが、指導者や先輩の研究力および指導力の不充分さとともに、大学に戻った留学経験者が留学中に収めたような成果を上げていないことを物語っているようにも思う。研究体制や環境が違って自らの工夫や改善によって、少なくとも留学先での成果と同等以上の業績を上げてこそ、責任の完遂であり、真の実力である。若手研究者の皆さんには、厳しい一時期が予測されても、研究の歯車が小気味よくリズムを刻む環境に飛び込んで行って欲しい。要は、

自分が学ぶ研究室(教室)を選択する機会が訪れた時には、その研究室の指導者や諸先輩がどのような研究に対する考え方や実績を持っているのかよく把握することである。

それでは、研究者の原動力とは何だろうか?それは、研究への興味である。研究が“おもしろい”ことである。自分自身が興味を持ち続けられる研究テーマに尽きる。さらに、原動力の一端には研究に伴う責任があることも忘れてはならない。世界的に見れば、貧困・飢餓や宗教・民族紛争等の政情不安が高等教育はおろか、数多くの子供の命さえ奪っている。また、わが国においても、高等教育を受けたくてもその選択肢さえ持ち得ない人も少なくない。また、研究者の非正規雇用も問題になっている。したがって、われわれは高等教育に引き続く研究生生活を享受できているこの事実に感謝するとともに、目に見えぬ多くの人々の夢や想いを背負いながら学究生活を送っていることへの責任を自覚しなければならない。さらに、われわれには医学研究を通じて、直接的、間接的に人類の健康や福祉に貢献するという根源的責務を負っている。すなわち、われわれの研究は単に個人の夢を実現するための手段では済まされず、ましてや「道楽」としての研究は許されなくなる。本学部において、信じ難い論文捏造事件があったが、論文や業績ひいては功名心や昇進が研究の起点や目的であってはならない。それらは、“おもしろい”研究に没頭した副次的報酬であると、改めて心に刻みたい。一方、昨今、おもしろいからというだけの理由で研究を継続することは困難になった。実効性や回収性を求める最近の社会の風潮が、社会還元性や貢献度に重きを置くようになり、たとえ学問的に意味のある研究でも実用性や実効性に乏しければ、研究を支える助成費等の獲得が難しくなったからである。確かに、社会への発信を含めた還元は不可欠だし、限りある財源の前には当然でもある。ただ、研究者個々の興味や情熱を揺さぶる研究テーマに着手、継続させる社会的余裕が、長い目で見れば、学問体系や理論的伝統に基づくアカデミズムの確立、すなわち、人類への還元性や英知の集大成を促す

側面があることも忘れてはならない。学問そのものにあまりにも功利的な視座を置くことは危うさを伴う。「一見、趣味」のような基礎研究による成果が多方面の研究領域に進展をもたらすことも少なくないのだから。

後段は、競争的研究資金と評価について言及させて頂き、締め括りたい。文部科学省科学研究費（文科省科研費）が大学人にとって、また、研究者にとって最も大事なものであるという認識の上に立ち、僥越かつ不本意ながら、文科省科研費に関する生臭い短期的数値目標を学内広報誌等に掲げさせて頂いたり、教員任用の申請資格に文科省科研費に関する要件を加えたりした。われわれは大学に籍を置く身であり、研究者でもある限りは、わが国最大の科学研究原資であり、最も公正公平でもある文科省科研費を最重要視するのは至当である。もちろん、文科省科研費以外の競争的研究資金の積極的な獲得も大いに歓迎される。なぜなら、第三者評価という選考のふるいを通り抜ける訳だから。医学部の文科省科研費の獲得は、この数年来、採択数・額も増加傾向を示し、平成24年度のそれらは短期目標にほぼ到達した。これは、平成23年度からの大幅な科研費の増額という追い風もあると思うが、教員（研究者）個々の自覚、研究活性度の高まりと優秀な人材任用によるものと喜ばしく思うとともに深く謝意を表したい。さらなる採択実績の向上のためには奇策や近道ではなく、極力、情実を排する継続的な優れた人材任用・登用と育成、研究基盤（環境）の強化に基づく質に重きを置いた研究成果を重ねていくしかない。すなわち、いくつかの研究種目以外は、卓越した研究実績（論文）なしに採択されることは少なく、採択率が20数%だから5回申請すれば1回は採択されるという代物ではない。また、実際的なことを言えば、審査

細目をよく吟味することが採択の可能性を高める。人に評価してもらう申請書であることを思えば、体裁の整った理解しやすい申請書作成は申請最低条件である。時間が無いとか、研究施設や設備が整っていないと嘆くのではなく、頭を使ってよく方略を練ることである。睡眠時間を削れば時間はできるし、大学内での共同研究に広げることや外に活路を開くこともできる。“おもしろい”研究に、地道にひたすら打ち込むことが研究活動すべての原点である。

昨今、若い先生方もインパクト・ファクター（IF）を意識して投稿している。IFが個人の研究業績評価に幅を利かせているが、これは論文（研究）の質を担保するものではなく、研究者個人の評価には不相当である。一方、論文数だけでも研究の質は保証されない。最近、物理学者のHirsch JEが、発表論文数と被引用回数を単一の数値で示す質・数を包含したh指数を研究者業績評価に有用であると提唱している。世の中では、常にこのような指標で研究者は評価されていることを念頭に置きながら、自分はどのような立ち位置にあるのか、客観的に時流の評価法で自らを照らしてみることも必要である。しかし、これらの評価数値に振り回される愚挙は避け、一番肝心なことは不屈の新知見探求者になることであると肝に銘じて欲しい。

実験研究では予想する結果が出ることは少ない上に、その結果に再現性の確証も得なければならない。換言すれば、失敗や挫折を味わうために研究をしているようなものである。特に、時間の少ない臨床の若手の先生方はきついと思うが、その中で、幾多の失敗にもめげない、そしてライフワークにもつながる“おもしろい”研究テーマとの出会いを切望してやまない。